

新・下野市風土記

歴史＝「がまん」？



下野市教育委員会 文化財課

1万人の子どもたち

風土記の丘資料館が県から市に移管されて3年が経過しました。この3年間におよそ1万人の県内小学6年生が見学に来てくれました。このほか、学校に石器や縄文土器、瓦や奈良時代の食器などの実物を持参し、それに触れることで歴史を身近に感じてもらう出前講座も行ってきました。今年度も、市内の小学校に年間を通じて5回ほど行き、縄文時代・弥生時代、奈良・平安時代から鎌倉・室町時代までの歴史学習のお手伝いをしました。

2月上旬の最終回の歴史学習では、2クラスで同一テーマのディスカッションが行われました。テーマは大きく2つとして、その1つ目は「歴史を学んで何がわかったのか?」、2つ目は「歴史をなぜ学ぶのか?」という歴史を学ぶ大学生のテーマのような深い内容で議論が展開されま

した。当初、小学生には難しすぎるテーマで、ディスカッションは無理ではないかと思いつながら静観していましたが、次第に熱を帯びた議論が展開され、最後は私も議論の中に入れてもらい楽しく議論させていただきました。

がまんとは

議論の中である児童から「歴史上の人たちは、がまんをしていた」という内容の提言がありました。彼は、徳川家康を題材に「幼少期に織田家の人質になっていたことから始まり、終生がまんをした人生だったのでは?」と流ちょうな説明をしてくれました。

この「がまん」という視点は歴史を学ぶ上でとても優れた視点と思い、少し深掘りするように次のような話題を提供しました。

なぜ、国と国、個人と個人は戦争やケンカをするのだろうか?

集団や人がなぜ争うのか、これをがまんということと関連づけて考えてみましょう。

私もかつては「今の若い人達はがまんが足りない」と指摘を受けた世代なので、果たして6年生は、がまんを理解できるのか?と思いましたが、児童の皆さんからは「がまん」を中心に据えた的確で明快な発言が多数ありました。

そこで、歴史において繰り返される争いについて話しました。皆さんはもう、いろいろなことを学習しているのだからケンカなんかしないでしょうし、殴り合いのようなこともしないでしょ。でも日本人は長い歴史の中で第二次世界大戦までずっと腕力による殴り合いだけでなく武器を使って戦争をしています。

縄文時代の狩猟採集の生活は富がほぼ平等に分配されたと考えられ、争いは無かったか少なかったと考えられています。しかし、富が一定の権力の元に集まる弥生時代以降は、その富を「取る・取られる」の関係から「がまん」が生まれ、うらやんだり、ねたんだり、それを契機

に争いごとが頻繁に起こるようになったと考えられています。個人同士もそうですが、国と国も沽券にかかわるとの考えから始まり、がまんの限界のような状況、振り上げた拳を下すことができず、悲惨な戦争に至ったとも考えられます。

第二次世界大戦や太平洋戦争について学んだと思いますが、国と国などの集団間の戦争の場合、果たしてすべての国民が戦争に合意して大戦になったのだろうか?それとも、嫌だ・だめだと反対意見を言えない風潮、言うことをがまんしなければならなかったのだろうか?拳を振り上げる前に、なぜ話し合いができないのだろうか?これらを考えることが歴史を学習する意味の一つではないでしょうか。中学・高校で歴史を学び、大人になったときに思い出してもらえればと思います。

なぜ、歴史を学ぶのか?

その答えの一つに「すべての人が不安なく、幸せな人生を送れるようにするため、過去に学ぶ」のではないかと思います。